

中間の歌:パート2
悲しみと喜びの間で
ポー・スターン・ブレディー
2024年・9月・29日

登りの歌。これは彼らが年に3回行方エルサレムへの旅のための歌です。春には過越祭、初夏には聖霊降臨祭、秋には仮庵祭。彼らは礼拝に行き、その途中で思い出すように言われました。神がしてくださった良いことを思い出すように。彼らが対峙し、倒した巨人を思い出すように。その過程で神が彼らを変えてくださったことを思い出すように。

ユージン・ピーターソンは、エルサレムへのこの登りの過程を説明する際に、ニーチェの私が大好きな言葉を引用している:

「天と地において」最も重要なことは...同じ方向への長い服従です。その結果、長い目で見れば、人生を生きる価値のあるものにする慰めが常にもたらされてきました。- フリードリヒ・ニーチェ

同じ方向への長い従順。同じ道を旅する。どこにも通じない道ではなく...エルサレムへの道。エルサレムはイスラエルの民にとっていくつかの異なる意味を持っていた。そして、これらのことは、私たちが昇天の歌を読むときに意味を成し、重要になると思う:

それは安全を表します。
それは神のみの統治と統治を表します。
それは平和を表します。
それは喜びを表します。

詩篇 48 篇では、エルサレムは全地の喜びとされています。夫は仕事でよく出張しますが、私たちはまだ新婚だと思っているので、夫がいないのは二人とも嫌です。しかし今週、夫はハリケーン ヘレンの進路に突入しました。ある日、夫は私に音声メッセージを残し、「あなたとパイパーの元に帰る準備は万端」と言っていました。そして、はい。私もまったく同じ気持ちでした。私たちの家に着くことが全地の喜びだと誰もが思うわけではありませんが、ここが私たちの家なので、それは私たちの全地の喜びなのです。

イスラエルの人々は故郷に向かって進んでいます。落ち着きと豊かさと喜びに向かって。そしてそれは私たち皆が人生で向かおうとしていることでもありませんか？ 私たちは安全に向かって、人生における神の支配と統治に向かって、平和に向かって、喜びに向かって進んでいませんか？ 登るのは中間です。私たちがこれまでいた場所とこれから向かう場所。それは私たちが手放した空中ブランコとまだつかんでいない空中ブランコの間の旅です。

上昇の歌を信じるなら、その旅には同じ方向への長い従順さが必要です。揺るぎない忠誠心。旅が長く困難になっても道から外れないこと。コミュニティを捨てて一人で行くことへの抵抗。こうして私たちは喜び、希望、そして故郷にたどり着くのです。

ユージン・ピーターソンはこう言っています。「私がキリスト教徒にとって有害であると特定できた世界の一つの側面は、価値のあるものは何でもすぐに手に入るという思い込みです。そうです。これが私たちに害を及ぼしています。この一攫千金、群衆を増やし、プラットフォームを構築し、クリフのノートを使い、電子レンジで温める文化は、その上に築かれるものの重みに耐えられる人生を生み出していません。プロセスには美しさがあります。プロセスには構築があります。プロセスは不可欠です。」

詩篇 126 篇は、私が最も好きな上昇の歌のひとつです。旅に疲れたときによく読みます。希望が薄れてきたり、足が弱くなったりしたとき、詩篇 126 篇は私の戦いの歌、賛歌、人生、結婚、子供、死、喪失、愛の道を歩むメロノームとなって、この 50 年間を支えてきました。死の影の谷を私とともに旅してきました。この歌は今でも健在です。頑丈な作りです。

“主がシオンの繁栄を回復されたとき、われらは夢みる者のようであった。その時われらの口は笑いで満たされ、われらの舌は喜びの声で満たされた。その時「主は彼らのために大いなる事をなされた」と言った者が、もろもろの国民の中にあつた。主はわれらのために大いなる事をなされたので、われらは喜んだ。主よ、どうか、われらの繁栄を、ネゲブの川のように回復してください。涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る。種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。”

詩篇 126:1-6 口語訳

この詩篇は2つの部分に分かれています。前半は祝福、後半は嘆願、そして神が以前になされたことの繰り返しを求める切実な訴えです。1-3節と4-6節。

まず、人々がすでに起こった美しいことを歌っているのが見えます。

“主がシオンの繁栄を回復されたとき、われらは夢みる者のようであった。その時われらの口は笑いで満たされ、われらの舌は喜びの声で満たされた。その時「主は彼らのために大いなる事をなされた」と言った者が、もろもろの国民の中にあつた。”

詩篇 126:1-2 口語訳

ここで詩篇作者は、奇跡的な国家の解放について述べています。この「幸運」という言葉は、「捕囚」とも訳されます。主が私たちの捕囚を回復してくださったとき、つまり主が私たちを解放してくださったとき、私たちは夢を見ているような人だった、という言い方は面白いです。この歌が正確にどの出来事について言っているのかはわかりませんが、イスラエルの民が紀元前538年にバビロンを離れることを許されたとき(ゼルバベル/50Kに率いられた)だと考える人が多く、この詩篇の作者はエズラではないかと学者たちは推測しています。作者がどんな出来事を描写しているかに関係なく、この文章は私にとってページから飛び出し、私の現在の世界に飛び込んできます。私たちを取り巻く絶望感、私たちの国が平和、笑い、喜びの歌で満たされるという考えを夢のように思わせることがあります。それがこの歌の重要な部分である理由だと思います。彼らは、もう一度神にお願いする前に、神が彼らのためにしてくださったことを歌っているのです。彼らは思い出し、リハーサルしています。彼らは過去の喜びに浸っています。私も時々そうしなければなりません。私の人生における神の良い経歴をリハーサルし、再考しなければなりません。それは 2 つのを行います。1) 気分が良くなります。(科学 - 幸福を 2 倍にする) 2) エルサレムへの道を歩み続けます。喜びは過去の上に築かれ、未来から借ります。最初のクリスマスの飾りを見ると、なぜ心が躍りますか？ それは、クリスマス

に真実であったと知っているものを借りて、これから来るクリスマスの喜びを与えているからです。それが、もう一度その飾りを取り出す理由です。1つが消えて、代わりを探す必要があるとしても、電飾を飾ります。去年、子供たちがそれを開けたときの顔を覚えているので、贈り物を買います。喜びに向かって進み続ける動機を与えるために、過去の喜びを借りているのです...それが、イスラエルの子供たちがここでやっていることです。

詩篇作者はこう言っています。「わたしたちの口は笑いで満たされ、舌は喜びの歌で満たされた。そして諸国民の間でこう言われた。「主は彼らのために偉大なことをなされた。」

神がここで彼らのためになされたことは何でも、他の国々でさえもそれを見ることができ、神に感謝するほど大きなことです。それは彼らが物理的に捕らわれの身から解放されたからかもしれませんし、人々が実際に、本当に、完全に幸せになるのを見るときという考えだけかもしれません。人々が喜びのために歌うのを見ると、おそらく彼らも彼らの一人になりたいと願うでしょう！今日の教会の喜びのレベルはどうなっているのか疑問に思います。私は、厳格な長老派教会の長老について、「彼はまったく利己的ではなく、長い人生で快樂を犯すことは一度もなかった」という引用を読みました。教会に通わない人がそれを表現するのに「幸せ」が最初の言葉になるかどうかはわかりません。しかし、それが私たちにも当てはまるとしたらどうでしょうか？それは私たちにも当てはまるべきだと私は主張します。私たちは、地球全体の喜びである神に仕えています。一番でなくても、一番大きな声で歌いましょう。一番幸せで、一番親切で、一番楽しい人々になりましょう。失うものなど何もありませんから。従順が長く続くなら、幸せな従順であるべきだ。そうすれば、人々は見て、「彼らの神はなんと素晴らしいのか」と言うかもしれない。

詩篇の後半は、祈りへと方向転換します。今、彼らは喜びを与えてくださった神に、もう一度喜びを与えてくださるよう求めています。

“主よ、どうか、われらの繁栄を、ネゲブの川のように回復してください。涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る。種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。”

詩篇 126:4-6 口語訳

幸運を回復してください。このフレーズがここで繰り返されているのは、私たちが神に以前して下さったのと同じことをお願いしているのだと作者が歌手に理解してもらいたいからです。神がして下さったことを知ることは、彼らが神にもう一度お願いするための許可構造を作り出すことです。

ネゲブの小川のように、ここはイスラエル南部の乾燥した地域です。乾燥しています。雨が降らなければ何も育ちません。しかし雨が降ると峡谷は水で満たされ、突然花が咲きます。突然、春がやって来ます。神の民は、全地の喜びであるエルサレムに向かう途中で、この歌を歌っています。雨を降らせてください。雨を降らせてください。種に水をやる雨を降らせてください。

この歌の部分には、ネガティブな瞬間をポジティブな結果に結びつける美しい三つの考えがあります。

種を蒔き...刈り取る

泣いて...歓喜の声を上げる

出かけて...家に帰る

涙を流しながら種を蒔く人は、喜びとともに収穫する。涙を流しながら種を運ぶ人。とても感動的です。エジプト人は、豊穡の神は種まきの季節に亡くなり、収穫期に復活すると信じていました。多くの点で、古代の伝統は種まきと悲しみ、そして喜びと収穫を結び付けているようです。

しかし、私が皆さんに覚えておいてほしいのは、種を蒔くこと、悲しみ、泣くこと、笑うことはすべて同じ人々の中で起こっているということです。仕事は現実であり、収穫も現実です。悲しみは現実であり、笑いも現実です。これらはすべて私たちの同じ心の中に共存しているのです。

時々、私たちは涙を流さずにいられる神を望みますが、その代わりに、ダビデが「神は涙を一つ一つ瓶に集める」と言ったように、熱烈に涙を尊ぶ神がいます。私たちが流す涙は、種を蒔くための土地を潤すのに役立つのかもしれませんが。私が知っていることといえば、私たちの人生は悲しみと歌、絶望と踊りの両方の故郷となるということです。そして真ん中には...ヤハウェがいます。全地の喜びです。旅を統括します。私たちを彼の意志へと導きます。私たちが歌うとき、私たちが泣くとき、彼が何をしたか、そして彼がこれから何をするかを思い返すとき、彼の道を教えてください。

私たちがすること: 主の御前に共に進み続け、その途中で主が何を言われても従います。

主がすること: その他すべて。